

18.

———, 1990: 鳥海山の深雪地帯における積雪底と土壌表層の 1986/87 温度通年観測, 天気, 37, 45-52.

Tsuchiya, I., 1984: A very small glacier on Mt. Chokai, Janan, 1972-1981. Geogr. Rev. Jpn., 57

(Ser. B.), 142-153.

山形県酒田市立第二中学校山岳部, 1958: 鳥海山の気象, 96p+5 chart.

吉田作松, 1951: 岩手山における雨量の高度分布, 気象庁研究時報, 3, 364-367.



平沼 洋司 著
くらしとビジネスの
お天気経済学

恒友出版, 1990年5月刊
281ページ, 定価1,200円

「お天気経済学」という経済学の分野がないことは容易に想像できるので, 本書がお天気に関する話題を取り扱っていること明らかである。そしてその場合, 話題がくらしやビジネスと関係するであろうことも, おおよそ見当がつくことであろう。そうすると, 「くらしとビジネスの」という修飾はなくてもよいことになる。そればかりか, この修飾のために, 近時話題となっている地球環境問題に関する記述が, 量的に本書の後半を占めていることを予測し難い。本書の紹介も, この二つに分けて行わなければならないことになる。

まず, 「くらしとビジネス」すなわち商業等と天気との関係である。「あとがき」に述べてあるように気象と経済の関係について定量的に解析することは必要なことである。何事であろうとも世の中の出来事を正確に認識するということは, 望ましいことであるという単純な理由だけではない。世界気候計画(WCP)の中の, 世界気候利用計画(WCAP)や世界気候影響調査計画(WCIP)における問題設定, すなわち比較的短期的な気候データの有効利用と長期的に歴史の動向に影響を与え得る因子としての天気を始めとする大気現象について客観的な議論を展開することが, 現在要請されている。といっても, このことはたやすいことではない。

しかし, 必要なことであるとすれば, 本書が取り上げているような事例を積み重ねて行くより方法はないであろう。それらが, ある時間断面における瞬間的な姿であることは現状では止むを得まい。今後, その周辺の変動の中で歴史的な展開としての把握の方向に進むことが望まれる。このような立場からの紹介がなされることは本書の企図する範囲を大幅に超えていることと思わ

れるが, この種の議論が進んでいないことを考えるといわずにはその段階まで踏み込むことが必要になる。

次いで, 地球環境問題との関係である。今日「お天気経済学」という趣旨で書物を著すならば, 如何に入門的, 初歩的なものであっても, この問題を避けて通るわけにはいかない情勢にあることは明白である。というより, 問題の複雑さから地球環境問題をめぐる議論が初歩的段階にとどまっている現実が, 本書にも世の中を啓蒙する義務を生じさせているということであろう。

しかしながら, この立場から本書の内容には疑義が無くもない。たとえば, 雪を利用した温度差発電でフロンを用いる事例で, 今問題となっている大気中への漏出は外部に漏らさない循環方式をとっているので心配ないと簡単に片付けられている件である。冷蔵庫で冷媒として用いられているフロンも, それが漏出しないから冷蔵庫として機能しているのであり, 廃棄後環境に対して全く配慮すること無く大気中に放出されることが今問題となっているのである。著者が, エネルギーや資源の節約が重要であること本書中で度々述べているので, このような指摘は揚げ足取りに近いが, 敢えて指摘することとした。

商業等と天気の関係と地球環境問題を本書という形で結び付けるからには, 両者の有機的な結合がもっと試みられているかと思ったが, ほとんど行われていない。両者の結合ということは目標にする価値がある。たとえば, 電力の使用量の記述とエネルギーの無駄使いの話を結び付けること等が可能であろう。

以上紹介というより批判が過ぎてしまっている。しかしこれはこの分野に膨大な蓄積を持つ著者の今後の活躍に対する期待の表れである。

堅苦しいことから離れると, 最も面白いのは「CM気象学」である。TVCF等のコピーのコレクションであり, CMの受け手が気象及び気象用語に持つであろう意識をコピーライターという人種がどう考えているか, すなわち日本人の持つある種の平均的気象像が推測できる。(お茶の水女子大 地理・田宮兵衛)